

投げこんだ菟蕪玉に玉げてやブル／＼顫ふ初心の小娘
池の坊插花の法は娘氣の眞添ひたいで浮苦勞する
お祭りに袖を引かれた縁しこそ汽車に引かるゝ果てとなりけれ
和らかくふつくりとして色白きイモが膚の蟹のはんべん
くる／＼と糸繰り娘糸くれど戀しき人はくるよしもなき
戀人にあふせを急ぎ活辯が虎ぢゝいをば猫ばゝにする
垣間見てさて美しくしき姫の肌人も透綾の帷子のぬし

栗津 温 泉 冬期此邊すげのみのぼしをかぶる

通ひ來て菅の蓑帽子すげなくも栗津にかへる木場の雪道
忍びあふ暗路に犬の尾を踏みてワンてふ聲に暗中飛躍

史 人

フエテオ及ヂスレリー

喧嘩なら買ふてもやらう兩の手に餡パンもあり拳骨もあり

拿破崙 破 崙

英雄の事業は同じ輕業師あぶない綱をワーターローとして

カイゼル

千萬の人千億の寶消す起因は魔王三寸の胸

打ち寄する世の風潮をせきとめて百年あとへ戻す怪傑兒

ロマノフ朝

二世紀の偉業一朝地に墜ちてあへなく消ゆるロマノフの朝

二 武 夫

もろともに船は沈めど名は揚がる廣瀬武夫と山脇武夫

都築男爵 大使任命の内意に思案中ときよて

喰ふもうし棄つるも惜し、かしは銅箸でこつ、都築雞肋

名實相反 文治元年頼朝總追捕使に任せられ鎌倉幕府始て成る

政權が武門に移り武治の世の第一年が文治元年

退位後の露清皇室

柴舟にさすなよ竹の水馴竿なれぬ仇浪漕がんとすらん

牝鶏の晨の霜のしげ、ればあへなく朽つる桑の若ばえ

雪霜に堪へで朽らにし吳竹のヨに出づる芽はあらじとぞ思ふ

ぬば玉の夜は禰神の荒ぶるも明くれば赤き日を迎ふべみ

金甌無傷缺

雨風は絶えず襲へど幾千年かはらぬ富士の姿尊とき

仁は安宅 孟子曰仁は安宅なり義は正路なり

落ちて行く人を正路に見て免かず仁は安宅の花の關守

紫式部

言の葉の緑りに花の紅を解き交ぜたらむ紫式部

物集女高見博士

廣文庫幾萬卷の物集め今ぢや高見の見物をする

戴天仇

武士道は不俱戴天と教ふるに戴天仇と流石支那人

仕立屋銀次 日本一の拘換親分

百千の手下をしたて屋銀次でも身の碇ひは縫はれざりけり

源三位頼政

射るまでの苦心を人は白真弓あやめなどより引きぞ煩ふ

高倉に通へる頃の頼政が庭の鶯輕舉々々と鳴く

近眼代議士 同行者中川枕流の話による

幾度か道を問へども答へせぬ憎つくき奴と案山子鞭うつ

伊藤と大隈

新聞に「故陸奥伯は云へり伊公は前途の荆棘を刈りて後進み隈侯は荆棘を蹂躙して進む」と。

荆棘を蹂躙する勇は大熊で刈りて耕へす智は春敵なり

玉塚天保翁

玉藻かる隠岐の宮居の櫻にも天保錢を空うするな

時頼の母

時頼の母は膽をや潰すらん紙幣で障子の切張りをする

尾上松助

松助と仙女香とは日本一蝙蝠安の評判を取る

西郷南洲 下二句南洲歌詞を假る

狡兎つきて吠ゆる良狗を韓國へ送らむ君が素志知らでや
乗り掛けし船はいつかは碎けなむ風吹かば吹け浪立たば立て

大久保甲東

堺縣令白根多助氏へ贈られたる歌「音にきく高師の濱の濱松も世の仇浪は免がれざりけり」により原歌を假りて。

音に聞く高師の濱の仇浪の寄せてぞ袖の濡れもこそすれ

木戸松菊

世の春となるをも待たで松菊の烈しき霜に堪へで萎るゝ

大隈 夔 侯 大正三年首相となる

大隈は流石にえらし一本の足でニホンを背負つて立つとは

勝海舟

穩便に大江戸の城明け渡し負けるは勝の手がらなりけり

山岡鐵舟

沈しづむべき鐵てつの舟ふねも張はりやうで國くにを守まもりの鐵艦てつせんとなる

大久保一翁

大久保の躑躅つとむは江戸の花曆はなごよみ序文しよぶんは彦左ひんざ跋はつは一翁

福島大將ふくしま だいしやう少時切干しやうじきりかんを常食じやうじきとして勉強べんきやうす。

膽力たんりきを練馬ねりま大根だいこんの切干きりかんで單騎たんき旅行りょこうの手綱たづな綱なりけん

東坡

雲うみかゝる松まつは知らでや過ぎぬらん羨うらやまむは蓬はうと蒿こものみならんや
髯ひげの中に何か仕掛けがあるらし、滿地まんぢの珠玉しゆぎよく迸はなり出る

太公望

熊くまに非あり熊くまにもあらぬ獲物えきぶつこそ世よにも稀まれなる古狸ふるねこにて

松方侯

某旅店の三助侯の背を流し其の體格の偉大を賞しつゝ曰く且那角力になれば善かつたに云々。

大關おほせきとなれる體からだを持ちながら惜しい事した今ぢや駄目だよ

大岡議長

議長ぎぎやうぶり又大夫おほうぢぶり共に可よし政治家せいじかとして藝人げいじんとして

吉村又右衛門きちむら 又えゑもん 福島家の勇士むすしなり又荒木又右衛門あらかみ 又えゑもん吉村

又右衛門又えゑもん吉村きちむら々々又右衛門又えゑもんどちらにしても一騎當千

圓遊

ハナシ、はテケレツバット名を揚げて郭巨くわくきよの釜かまを鼻はなで掘出す

國益親玉

乙女おとめ等は驚おどく勿なれ天狗星てんくうせい織女星おひせいせい坐まへ夜這星よひばしとて

葛藤纏樹

鳶葛身に搦みつゝもろともに空く朽つる城山の露

鹿島ボン太名妓の果は賢婦人の名高し

氣高さよ烏帽子水干太刀佩いで鼓の音のボンタ夫人は

佛國公使トリクター 日露戦役頃の公使

牛や豚賞づる毛唐の其の中で流石巴里の通はトリクター

鬼 權

吾々は鬼とくさせど地獄では歸朝者として歓迎やせん

金澤市長山森隆

貧民に南京米の拂下げ御蔭で飯も山もり高し

同騷擾事件

憎しとて人な咎めそ聞の戸の明けて言はれぬ事もあらなん

河瀬貫一郎

縣會議長として一方の牛耳を執り遠藤秀景と對峙せし人近來陰遣釣りに熱す

漁父の利を占めて立ちたり鮎釣りは蛤坂の下の川瀬ミ

繪に書きし淀の川瀬の水車近頃とんと音も聞こえず

勝區古跡

宇治の茶摘み

嬰兒が縁を分けて探る手の乳はふところ宇治は茶所

函根温泉

蚊の疵のなき函根路は千兩に鑑一文も引けぬ夏の夜

飛驒山中

繪に書かば如何に愛たき眺めとて越ゆるに難き飛驒の深山路

千仞の瀧 白山々中

千仞の飛瀑を登る虬龍と見しは苦むす巖根なりけり

女郎の瀧

同山中に在り前帯の垂れたる様おいらん道中を見るが如しといふ。

仲の丁練りあるきなば燈籠に涼しさ添へん女郎の瀧つせ

安宅の關趾 今は浪うつ磯にあとを留むるのみ

名にしおふ關は潮に洗はれて安宅も海の如くなりけり

富樫城趾

秋風や誰が乗り棄てし鞍が嶽富樫が城の趾の虫の音

松任の館ころ 名物あんころ餅賣高北陸線に冠たり

山伏は汽車の窓から九字を切りあんころくよんだ松任

清見 瀧 丈山の白扇倒懸東海天によせて

羽衣の袖より落とす舞扇根ざしかためて富士となりけん

漁舟漕ぎかへる見ゆ夕餉たく浦の苦屋に烟り立つころ

日本海

大空にまふ雪黒く幾段の山なす浪を碎く荒磯

沖くらく鱒の寄る冬至空汐花ふゞく越の荒濱

白山遠望

雪深み外山はなべて白かれど黒く聳ゆる夕の白山

善光寺胎内潜り

くらやみを探り手で行く人間の一生は此の胎内くゞり

平湯湯瀧飛驒

雨雲の脚はゆらりと乗鞍の前輪をすべる薬湯の瀧

立山

白雲のかゝる険しき立山の岩根を嚙る姫百合の花

直江津

漁火も里の篝りも微の見えて夕風涼し荒川の橋

高田

雪に名も高田の町は埋もれて地下室くゞる雪のトンネル

戦場が原

松風に猶矢叫びの聲すなり治まれる世の戦場が原

木蘇

朝霧の霽るゝにつれて遠近の景あらはるゝ木蘇の山道

春日山謙信城趾

鹿の棲む奈良にはあらで春日山越路の虎のすみし古床

萬代橋信濃川

杜鵑八千八川遠近の人の行きかふ萬代の橋

筋違見附跡

筋違の原は電車の蛛手道實に隔世のカン田須田町

関の渡し

歐洲の軍につれて威勢よく闊渡る職工の群

御茶の水

船頭が船臍で沸かす御茶の水こゝは浮世の塵も到らず

浮世小路 三十年前はこゝに奇麗な牛肉店ありき

色と酒浮世小路の別世界和らかな肉温かな鍋

吉原

夜廻りのチャリン／＼「火の用心さつしやりませう」が明治初年に調練大鼓のチャカ／＼ジャンとなり又復舊す。

吉原の金棒曳きも御客へは身の用鎖さつしやりませう

回向院

諸名士の墓は苔むし唯一基香華絶えせぬ次郎吉の墓

千束町

折角と洗ふた足を圍ひ者千束町は復も浸水

神樂坂

牛込や岩戸神樂の町々に鉦女の命さはにまします

焼餅坂

情合は世界一般ブルドグも焼餅坂でチン／＼をする

日暮里

色と慾酒と喧嘩で日暮しの茶毘の烟りとなりてはつまで

蠣殻町

米屋町是は飯の種胡麻鹽をふりかけたりな白と黒うと

夕場立會

入相の鐘にちり／＼ばら／＼と時へ歸るカラスカンピン

大根河岸山王祭神樂 南北紺屋町

きのふから京橋詰のおかぐらをコンヤ町から南に北よ

隅田堤

隅田から淺草上野花めぐり摺鉢山で足もすりこぎ

故園新莊

金澤市

三府三大市に亞げる都會にして市人優雅溫和なり予故ありて前後殆ど十年此地に在り只冬期四ヶ月間北國のならひとて風雪に鎖さるゝを憾みとす

火事地震泥棒沙汰は稀なれど多きは雪と謠ひ鮎釣り

田守金守

市の呉服屋中現今最も繁昌するは西部片町の金守(鍋屋)と東部武蔵ヶ辻の田守なり

横縦を金と田地で織りあげる東の田守西の金守

大桑酒店

片町の大桑は酒造家にて店には盛切コップ呑の客絶えず農村の人々又は勞働者など多勢一團となつて呑み居れるさまいかにも愉快に見受けらる

もつかりを二三盃づゝ引のかけぬオホクハ人の懐あてに

犀川堤の展望

ある日鷹芥焼場の邊りに徘徊せしに掃除人夫が能狂言の話しせるを聞き是ぞ百萬石のなごりなりと感じつゝ折から太田村の方より汽車の來れるを見て狂言末廣がりに寄せて。

一筋は末廣がりに曳く烟り太郎田あたりクワシヤや來ぬらん

柳堤雜觀

犀川柳堤より對岸蛤坂上寺町の高臺堂塔林樹を見る。

犀川に朝霧立ちて潮吹く蛤坂に蜃氣樓見ゆ

犀川鐵橋 附近近來婦人の蝶死頻繁なり

ヒステリで死ぬる女子のヒストリー實にやレキシは繰返すもの

俳優の乗込み 人力車にて市中顔見せに廻る

顔見せに役者が通る夕餉時下女は見とれて飯こがすなり

のみ

友人中川枕流は能登大吞の人なり加賀に能美郡あり 登に大吞あり上戸村あり何れも吾黨の呑助に適せり只越中にはいかゞといふ。

加賀の能美能登の大吞越中の蚤は大方括りめに居る

地 萬 歳 流行すされど他郷人には分からず

地萬歳詞わからず只聞けばキタコリヤフニヤ<<<<

萬 歳 樂 地震の際「世直れ<<」と唱ふ。

車井戸姪婦水釣り腹の兒は地震と思ひ世直れ<<

御開山親鸞聖人

加賀門徒とて淨土眞宗極盛の地なり金澤地方裁判所へ呼ばれたる證人某何を訊問されても知らぬ<<といひ只管南無阿彌陀佛<<を繰返す。

法廷で知らぬ<<と念佛是れ誤解さん知らぬ證人

根布の戴き

河北湯沿岸の漁村を根布といふ此村の婦人等四五貫目の川魚を盛りたる大飯切を頂上に戴き市中を賣歩く。

雑魚鬻ぐ根布の戴き尻ふりて足と頭のバランスを乗る

赤襟

市には四ヶの遊廓あり娼妓少なく藝妓多く雛妓を赤襟といふ上方風多く尻振りなど踊る。

尻振りの姿遺傳で巧みなり此妓の母は根布のいたじき

藝妓瓢箪

誘ふ水あらばや往なん瓢箪の浮いたくで日を送る身は

白山登山者多し春來の大雪にて雪溪數條盛夏猶消えず

學生の登山歡び迎へんと小倉の袴着けた白山

五郎島の蜆賣

肉は肥え粒は大野の黒蜆五郎島せと升で掬ひつ

鴻の 鮒 河北潟邑知潟などの鮒肉肥味ひ美なり

丁度よい鮒の洗ひで一ッ召せ否やヂストマがとも言ひ兼つ

近郊散策弓取村

加賀殿が入府の際に駒とめし北國一の弓取の村

尾上岩藤の對酌

懇親會の席上に石川縣廳の尾上課長岩藤技師など打ちとけて獻酬せるを見て

芝居とはうつて變はつた加賀見山いと懇な尾上岩藤

瓢湖

柴田潟と今江潟と連接して瓢の形を爲す景色絶佳なり南岸に片山津温泉あり大綱和尚の所謂胸のあたりなる串茶屋は往時繁盛ならびなかりし遊廓の遺跡なり。

瓢たんの胸のあたりの串茶屋に締めくゝりなく遊ぶ浮かれ女

朝ぼらけ柴山潟の海士小舟櫓の音は遠く月津松崎

男子産す

某紳士の下女病氣なりとて産登の生家に歸り居れるがある日其者より電報來れりとして夫人之を開けば分鏡の報なり紳士は顔色變へて奥の間へ逃げ込

み蒲團引きかぶりてうんく喰る。

月みちて一月廿日男子産す跡の仕末をドシテクダハル
下女からの跡の仕末は兎も角も今の仕末に頭痛鉢巻

豎町の火事

米澤福井など大火の報に人心恟々たる折柄の烈風に豎町の多田といへる大きな油屋に火ありとて人々驚き周章で駆け付けたるに直消し留めたりとて何の氣もなし。

咸陽の炎も嘸と思ひしにタテマチ消えて多田の油屋

伐木壓死

思ひきや能登の鳳至の袖人が伊久留の山で死ぬるべしとは

乘逃禪師

穆天子傳に狡走五百里とあり新聞に小僧狡親自轉車に乗逃げすとあり。

獅子に騎る文珠の智慧を借りものゝ自轉車に乗り走しる狡獪

宛然フキルム

同じ頃南町自轉車屋より乗逃げせし男あり刑事某亦自轉車にて追ひかけ犀川大橋にて追ひつき捕ふれば有名なる狂漢なり。

闐然に跡おひかけて捕ふればニヤリと笑ふア、アおまへか

毒を仰いで熟考す

寶船路町某少年死を決して毒薬を呑み心機一轉車を騙つて各病院を歴訪服薬し僅に一命を取りとむ。

毒を呑みそしてつらく按ずるに死ぬれば酒が呑まれざりけり

恬淡無慾の賊

五年臘尾長岡の寅治といふ若物松住町某飲食店にて濁酒一升五合を呑み肝聲雷の如く捕られて欠伸し。

呑んたけれど何にも寅治贖物はみんな便所へやつて来ました

書家歌川若菜嬢

來遊し書名高し青年書家某之に懸想する由の話しを聞きをかしく思ひて。

此の雪で手に入ることとはウタガハし苦菜摘まむと君はあせれど

金石女心中 かたはらをんなしんぢゆう 辻よく新村よく(共に二十)金石海中に投じて心中。

ヨクヨクの縁でこそあれヨクもヨクもよく気があふて女心中

啞の心中

七十二歳の啞爺と三十五六の啞女(大阪道)と金石の海に投じて情死す。

さゞ波に此の身を寄せむ諸共にヲシの衾を得まくほしさに
オシ出るや浪花女に加賀ぢは加賀丸腰をオシ伸して出る

風の神を説く

大正六年元旦より三月七日まで晴天僅に五六日に過ぎず然るに東京は一月二日より二月中旬まで雨なく蔬菜枯損し雨乞ひの聲高しと聞き一首を詠じて風の神に相談をかけたるに風伯納得したりけん其の後天氣順當となれり阿々。

風伯よ北陸の雲東海へ拂へ玉はゞ君の名揚がらん

歸厚坂開通式 きかうざか 藩主の徳を頌して名付けたる由。

仁政の下に樂む酒の爛アツキニ鱒の細作りして

鐘の撞始 かねのつづき 西本願寺別院の式に三名の藝妓白無垢襲にて撞始めに出づ

ツキ馴れし嘘ふりすて、煩惱を解脱の鐘の撞始め殊勝

萬人を手玉に取つた其の腕で撞くは懺悔の第一の聲

赤襟で嘘のつきをめ教はりて今白無垢で鐘の撞始め

妻は氷り?

金澤の人は冷澹女房をコーリくと冷やかに呼ぶ

落雷

五月九日犀川神社祭禮中境内縦の大木に落雷し樹下の飴賣氣絶す。

裏祭り雷さんの御參詣飛んだ御客と飴屋氣絶す

小供等が叩く大鼓に雷もまけぬ氣になりがらくびしやり

雷は落ちてしまふたもう是で雷鳴なしと小供の理想

論語の講釋

四高卒業式に校長論語の講釋せしとて嘲笑するもの少からず。

四高して後の爲ぞと知りもせで笑ふ者こそロンゴ道斷

夏寒料峭 五月十一日降霜字典外の奇語を得たり。

何事を菖蒲帷子被る節に道ゆく人は冬の装ひ

鮎釣

犀川大橋より犀川神社あたりまで四五丁間に二百餘人の太公望竿をならべて立つ川西は西北の二廓あり藝妓多し。

鮎を釣る人を釣らんと白拍子がぶらりしやらりと視線を垂るゝ

犀川の河原者かや立ならぶ兩花道のアイツリ人形

意氣地なき太公望が頭搔き何か巡査に叱られて居る

釣りあげて繼竿はづし糸手繰る其間にポチャンアイ左様なら

鮎を賣る婆々が居なくて鮎釣りの紳士から手で歸られもせず

釣 獨逸

犀川下流にて獨逸(先年農商務省より分附したる獨逸)の鱒の魚目五六寸に生長し里俗ドイツと呼ぶもの)を釣ること少からず

太公望さすが王者の師なりけり竿の先にて獨逸釣り出す

北國劇場

五年十一月羽左衛門劇を興行するに來着延びて再三日延べす。

大入の見越しが確と立花屋あけぬさきから二度日延べする

無罪もん

能美郡選舉違犯事件裁判所内立錐の地なく曰く彼は無罪もんぢや彼は何々と喧し。

あの人は無罪もんぢやと皆がいふ有ザイモンなら一芝居打て

狂 女

六年七月三社町と茶の木町とに三四歳の兒を喪ひて失神せる若き母二人あり前者は毎日此あたりを戸毎に吾が兒は居らずやと覗きあるきしが思ひあきり

て終に菊橋より身を投げて死し後者はたゞ僧としてあちらこちらろつき廻はる。

尋ねても彌々此の世に亡きからは同じあの世に跡を追はなむ
生れずば死ぬる嘆きもなからむを慰ひに世の風に吹かせて
いつくしの吾が兒はいづこあの世には乳もなからむ肴もなからむ
かあちやんもやがて行きますおとなしう賽の河原でかけて轉ぶな

茄子胡瓜 物價騰貴の例外

漬ける煮る鹽押しにする 茄子胡瓜一せおひ買ふて廿九錢

井水 潤る

旱魃にて井水潤れ用水を飲用するに至る弊慮の對岸に犀川地蔵堂あり二丁塚
上流に鬼川といへる用水路へ分流す八月廿九日此の分流水を夜間堰止めて水
流に落とし近傍各町始めて井水を得たり。

如何にせん犀の河原の水潤れて命の露とたのむ鬼川

生きて居ても生きがひなしといふ人が身投げしたくも川に水なし
鬼川を才の川原の地藏尊錫杖横たへせき止め玉ふ

洪水

旱魃に困しみたる跡に洪水に困むこととなり大聖寺町は再度の水害に侵水の
例しなかりし遊廓今出町穴虫などまで侵水したりとぞ。

例しなき水は廓へ今出町穴虫さへも屋根へ這ひ出る

笙の川 堤防決潰の虞あり村民大騒ぎ。

せゝらぎの笙の川波音立て、筆策ならで竹法螺を吹く

西廓梅照の開業 松丘枕流二翁の舊話を聞き。

丁字風呂すてきに熱くなりけり番頭水だ梅照々々

小 硯 子

墨染の袖を括りて小硯子が蛇籠の上に蝦しやくり居る

中村 田 圃 西、北二遊廓に接する處荒地などあり狐鼻など棲めり。

不夜城に續く田圃の鳥と狐の聲で地金あらはす

野市の橋渡り

野市といへる盲人運動のためとて長八十間の御影橋を毎日幾回となくトント
ンと往復す。

世の中は野市の杖の橋渡り只くりかへす事のみにして

卯辰公園

向ひ山又臥龍山といふ春日山木米寮跡鳴和の瀧等あり山麓夕日寺。

朝まだき露ふみわけて向ひ山夕日寺まで遊びくらしつ

晨

勤 眞宗朝の勤行に各寺院参詣者多し。

おあさじに婆々は栗むき爺は柿娘はあくび嫁は居睡り

田園雜興

武士の弓取村の苗代に矢なみつくらふ案山子雄々しも

桐の木は坊主となれど味噌玉は還俗したか毛が生えにけり

能美同志俱樂部

ノミ同志俱樂部といへば飲中の八仙なども會員ならめ

珠洲郡上戸村

郷紳に三盃氏あり同地銘酒宗玄芳醇なり此邊景勝に富み風俗敦厚なり。

吞たらぬ心地こそすれ上戸村たつた三盃宗玄の酒

加登長の仲居 各種の麵類を主とする飲食店なり。

ソバ女など私しやウドンで知りみしんソウメン倒な謎かけみすな

雙壁

昨年歿したる東の辨一(杉村虎一大使の兄)といふは金澤藩大参事として俸か
られたる傑物又大野辨吉は機關細工の名工にて非凡と稱せらる。

今は世に忘れられたれど雙壁は東の辨一大の辨吉

八百屋

八百屋は乾物干物等を併で賣る又胡蘿蔔をネーションといふ。

カンブツもネージンもある八百屋としてニシンを抱き胡麻錫賣る

藝妓少琴

といへるは孝順の評あり其の家の前に孰が曳き來れるか一奴新調の肥桶を車に載せてありたれば。

新らしく木の香も高き糸柱のいと見事なる對の肥桶

新らしく木の香高きもいかにせん盛るべき品の清くあらねば

加賀糯

は在外日本人の需用多く好評なり北國は總べて杼濁者より年末に肥代として糯米を納め各戸お正月の雑煎の料(肥ぞ積りてモチとなりぬる)となる。

外國で年迎へても古郷の姿うつせる加賀見餅かな

富山ホテル

壯麗なる割烹旅館なり神通川に臨める廁の板脱れぬれば。

吹捲くる神通川の川風は尻の穴から鼻へつきぬく

櫛比村全焼 能登總持寺の近傍なり。

櫛比せる家なみならぬに全村を残さず焼くは實に奇火なり

犀川地藏尊

二座あり一座は川より顯はれ玉ふて大同三年の文字あり此の川に流るゝ小供多けれど一人も溺死せるものなきは此の佛の加護なりとて信者多し。

あなたふと犀の川原の地藏尊お姿を見て逃げる鬼川

スミス飛行機 土音ひをへといふ

ふうくと黄なる烟りを飛行機の空に得しれぬ音立て、ゆく

お多福風 枕流翁感冒類をはらし困しさうなり。

老の身は乙女の袖も引きかねてお多福風を引き込みにけん

柳餅 金澤名物

金澤の女性は風に柳餅膚理は細かく氣は和かく

花園村

北陸線律橋森下間の同村は金澤市へ切花を供する處として花畑多し。

咲き匂ふ花園村の花畑花折り抱ふ花賣娘

秋 晴

晩秋の朝犀川堤に立てば毛皮の尻當に釣竿を肩にせる人々は下流の方に踵を
接し股引草鞋に籠を負ふたるは川上の方へ群をなす。

朝まだき堤ゆきかふ犀川の上へ茸狩下へ鮎釣り

兼六公園

松の間の花は土佐繪に花のあひの松は四條畫見る心地して

犀川一文橋

夕餉たく豆田の里の薄烟り汽車の烟りとゆれつ縋れつ

蛸 島

總持寺の大加藍ありし頃は數百の雲水たちが打ち連れだちて潮風に浴せし由

道場の雲水たちが潮湯治蛸が蛸捕る蛸島の磯

犀川曉望

犀川の堤に立ちて立待の月を居待の曉に見る

朝霞辰巳の山の山の端に炭や焼くらん煙り立つ見ゆ

朝まだき狭霧のあひに薄く濃く煙り立つ見ゆ野田の山かけ

北國劇場の幟十數旒 新橋側に立てたるを

犀川や朝霧こめて旗影の西條山と見ゆる野田山

柳堤 晩望

吹き送る糸竹の音は青柳の堤の外のおしやますの家

小野の豆腐 小野といへる豆腐屋柳堤を呼びあるけり。

傘さした公卿衆にあらで赤箱に達筆で書く小野の豆腐

眺望 絶 無 六年夏の頃新聞の廣告に見えたり。

夢香山三笠といへる貸席が廣告したり眺望絶無

聖 廓 大聖寺の遊廊をかくいふ

聖廟に孔子やおはすと尋ねれば寝くたれ髪にゴムの横クシ

東西南北

東西兩廓に遊蕩の結果嫁の衣類まで皆なくしつ金を借らんとて高利貸をつれて来て見すれば多くの簞笥皆からなり。

どのたんす見ても北なし南なし西と東へいれあげたあと

柏崎

越後の柏崎町は隣接の比叡把島大洲などを籠めて戸數三千日本海に面す、此地予の生地にて吾が家は廣小路といふ町なり近郷の小供等は「ふるこちのふらたの前でふらりと轉んで膝の皮ふんむいた」といひ嘯したり、予東京に移住してより三十餘年知人朋友過半故人となり隔世の感あり。

へろこぢのへらたの前でへつころびへざの皮をばへんむくは誰ぞ

おちよろけさん

小供等が鬼ごっこするは年少のもの鬼となれば年上もの「おちよろけさんや」と手を打ちたよきて擲楯ひながら逃げまはる。

腰まげて杖つく翁珍しやおちよろけさんと手を打ちし君

山やれく

孟蘭盆仁輪加とて奇怪なる假装をして男女老幼三味線大鼓などて市中を練りあるきたるは四十餘年の昔しにて小供等は空樽を叩き立て、「色氣のない奴ア山やれく」と嘯しつゝ先導せり。

餓鬼共が吾を侮り嘯し立つ色氣の無い奴ア山やれく

三階節

三階節とて特殊の俚謡あり盆踊りは此唄に限れり唄の中に町の肝煎なりし奈良屋市川下山田の三家を連唱せしものあり三人共今は北海道に移住せり昔吾が知人なり。

盆唄の奈良屋市川下山田蝦夷が島根に踊りつれてや

綿帽子

越後の綿帽子とて眞綿で拵へたる龜の子なり色々派手に染上げ若き婦女子の麗なる装ひとして背に被る。

染めあげし薄紫の綿帽子うしろ姿を君に見せばや

おけ

さ中越後一徹の俚謡

夕間ぐれ踊るあけさの間の手に後のあふ瀬を契りやはする

積雪

北國の雪は名物と唱ふ柏崎は海岸ゆゑさま積るねど高田長岡小千谷など飛常の積雪にて家内薄暗く點燈せざれば物見えず。

雪繽紛月皓々花爛熳こは是れ越の春の夕ぐれ

夜か晝か晴れか曇りか雨か雪か頓と分からぬ雪の埋れ家

雪道は屋根より高くそら窓に按摩すべつて膳棚に落つ

石地

此の町半ばは漁村にて鮮鱗の豊富を以て名あり三十餘年前此地の戸長たりし時角兵衛といへる人の空屋を借りて住まひ一日戸外に立ちしに村爺來り謁して曰ふ角兵衛の戸長さんはどちらですかと意外のことばに驚かされたり。

角兵衛の戸長さんなどはばいへ獅子も冠らず猫もかぶらず

新瀨

山下某てふ男おてふといへる娼妓を標し翌朝の問答を聞きをかしかりければ

朝なくやさしく咲くと聞きにしをなどぶつテフな君の朝顔
朝顔の佛テフなるぞ似やはしき夕顔面の君が對手に

響 石

南嶽の鸚鵡石は善く人言を反響す小倉百首其外遍く人口
に膾炙せられたる和歌等の詞句をかりて其の一二字又は
一二句を換へて其の作意を翻案したるもの

寒夜客不來

足曳の山鳥の尾のしだりをの長々し夜を獨鳴煮ん

下女の踵

足袋のうらにやれ出て見れば黒妙の下女の踵に輝はされつゝ

兒島高德

和田の原八十島かけて漕ぎ出でぬと人から聞いて去らば御跡を

天津大洪水

天津風雲の通ひ路吹きとびて乙女の麥屋根に止めつ

蝨喰の膚

心あてに取らばや取らん糸屑の置きまどはせる蝨喰の膚

仲居の眼

あけぬれば呉れるものとは知りながら猶眼を注ぐ客の紙入

細君の血眼

めぐりあひて見しや夫れとも分かぬまに雲隠れにし浮氣な亭主

店卸し

浮かれけし人の尻尾の店卸し貧しかれとは祈らぬものを

毎年子を生む女

吾が乳は鹽漬茄子の壓しの石の人こそ知らぬ干くまもなし

時立てど妻の歸らねばよぎなく飯をたく

來ぬ人を松葉の枝をくべすぎて焚くや一升の飯こがしつゝ

大宮驛にてパンを買ひたるにポロ／＼しければ

吾が國の米の粉とは見つれども大宮人はパンといふらむ

質流 浪花町の佐野屋へ入質したる品が洗れける。

原歌「駒とめて袖うち拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮」

品とめて利子うち拂ふ金もなし佐野の質屋の夜着のぬきわた

夕暮

夕ぐれに眺め見渡す隅田川一錢蒸汽淺野セメント

今道 灌

武蔵野時代に比して今の東京はせましく一寸油断をすれば電車や自動車に命を奪らる去れば入道の「急がずば濡れざらましを旅人の後より歸るゝ野路の村雨」も此のせちからい都市にては。

急ぎなば濡れざらましを旅人の後よりかける水撒き車

娘義 太夫 原歌「逢坂の關の清水に影見えて今か曳くらむ望月の駒」

鶴仙の御簾に娘の影見えて今か引くらむ太棹の駒

戲歌 原歌「樂みは夕顔棚の下涼み男はてゝら女は二布して」

樂みは夕顔棚の下涼み男はビール女は氷り水

除夜の鐘

原歌「年の中に春立ちにけり一年を去年とや言はむ今年とやいはむ」

除夜の鐘五十四五點揺く頃を去年とやいはむ今年とやいはむ

流行感冒

秋立つと目にはさやかに見えねども風の流行るに驚かれぬる

春道つらからず

花をかざし霞を被つゝ遊ぶ野邊など春道の列樹といふらん

貧乏人の質草

原歌「いとせめて戀しき時はぬば玉の夜の衣をかへしてぞ着る」

いと切めて困しき時は烏婆玉の夜の寝衣を秘してぞやる
清淨無垢

原歌「世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし」

世の中に絶えて女のなかりせば夜の心は長閑からまし
厭鬼

原歌「うたよねに戀しき人を見てしより夢てふものをたのみそめてき」

轉寢に足踏みはづし落ちしより夢てふものを怖れそめてき
静謐

原歌「いくそたひかき濁しても澄みかへる水や御國の姿なるらん」

幾十度なぐりあひても直なほる中や夫婦の喧嘩なるらん
雲翳晦缺

原歌「水の面に照る月次を數ふれば今宵ぞ秋の最中なりけり」

水の面に照る月次を數ふれど何が何やらトントわからず

毛蟲

原歌「吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり」

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは毛蟲なりけり

菖蒲の不作

原歌「五月雨に眞菰の池の水ましていづれ菖蒲と引きぞ煩ふ」

五月雨に眞菰の池の水まして今年や菖蒲を葺きぞ煩ふ

末の瀧坂 近時避暑地として遊客多しとか餅は餓の類なり。

原歌「君をおきてあだし心を吾もたば末の松山浪や越えなん」

君をおきて仇し心を吾もたば末の瀧坂餅やこえなん

馬賊

古池や蛙飛び込む水音に馬賊が来たと騒ぐ子々

十段目

真柴垣夕顔棚のかなたより顯はれ出でたる鮎三ツ四ツ

土手のいろは

三十年前二三の知友と浅草より土手のいろは牛肉店に至り酔ひを買ひて北里に遊ぶ。

熱爛の色は匂へど散りぬるを吾が涎ぞと構はずと呑む

「常ならむ有爲の奥山今日越えて吉原田圃つきぬけて來ぬ

名代で「淺き夢見し酔ひもせず京も又呑む土手の平松

裏の長家

原歌「來て見れば花も紅葉もなかりけり浦の苦屋の秋の夕ぐれ」

來て見れば釜もおはちも無かりけり裏の長屋の秋の夕暮

鶏肋

地獄六歌仙

姐嬢のお百

鬼共を騙して見たが娑婆のやうに眼尻のたれた奴が居なくて

朝比奈三郎

鐵門を打破らんと踏み込めば最う樊噲がやつけた後

石川五右衛門

娑婆に居て天ぶらにされ又こゝで釜うでにして油氣をぬく

高等内侍

妾等を地獄といへど角を出す鬼は貴君の鼻々左衛門

大根役者

世にしあらば吾も男地獄おそろしや此所は第二の母國なれども
相場師
極樂の舞臺廻ればすぐ地獄鬼より怖き追敷の沙汰

罵 呵

大豆の種類

青豆や局青柳、大納言、木浦古、南浦古、青洲、芝罘

朝鮮米

砂を抜く改良米の吐き口は釜山、元山、馬山、群山

麥の出品目録

力強き辨慶、關取、竹林、ダルマ、白矮鷄、南京坊主

陸稻

雀不知、大國、戰捷馬、鹿坊主、岩瀨、國一、糯の江會島

武士

うかれぶし、木附子、投節、浪花節、野武士、山伏、痛むふしぐ

むし

虫といへば音を聴くものぞ観るべきは蝶々蜻蛉と螢ばかりで
茶碗むし、まむし、炮烙、土瓶むし、袖むし、鹽むし、卵むしかな
むし物は結構なれば我が顔のたむしは頓とくへぬ奴なり

蘿 葡萄

大根は練馬、宮重、櫻島、新派、舊派の梨園の子弟

金 魚

出目、目高、丸子、蘭疇、獅子頭、和金、琉金、丸金、支那金

東京輸入諸國物産

寄り集ふ埼玉按摩相摸下女能登の三介上總權介
たのまれて越後から來る米搗きは迎も伊勢屋の腕に及ばず
名古屋種肉豊なる娘子軍今や越後の株を奪へり
見やう讀みやう處と物により同字異訓多し
讀みぐせで薄氷薄氷薄氷を踏む思ひして讀め
伊勢神戶攝津で神戶美濃神戶神代神代神代
横に居て君はへの字といふけれど吾はくの字を書いて居るなり

鬪 猫

背を聳て頸を歪めて睚みあふ金眼銀眼の大栗毛豹頭虎斑の逸物が屋
根の峽間に對峙して眼を怒らし牙を鳴らし爪を研ぐ正に是れ巖角風
に吼ゆる獅子負嶋雲に嘯く虎今や風雲砂塵を捲いて殺到せんとする

刹那、戰士の間に戛然と落つるは熟める柿一つ戰士は瞿然身を退けば
氣力は抜けて屁の如く西と東へ物別れ。

職業 競

炭團屋の小僧

鐵鎚でトンと叩いて炭團屋はおのれも只の根炭ぢやあんめい

骨董商

いゝ味に時代つきぬと賓頭盧のやうな鼻々を眼鏡越し見る

辯護士

是も亦不可抗力と辯護士は乙女に袖を引かれつゝ行く

畫工

心血を瀧いだせいか美人畫も花鳥虫魚も血の色淋漓

活辯

活辯が騙して借りた質草は夙に懸河の辯で流しつ

筈碁

伸びる出る仔猫はざる、筈碁とて白が覗けば黒が跳出す

俳優

役者とて意氣地なしとは限るまじ夏大根も骨はあるもの

在郷軍人

畑かり凱歌あげて旋りけり胡麻蜀黍を切りなびけつゝ

くだまくら

能飲法師詠

昔能因法師は顔を窓前に曝すこと百日、人間の賈物を拵へて、白河の關の秀歌を發表す罪なき偽りは却て風流の佳話として千載に傳へらる能登の景勝絶佳なるは世人の知る所にして予は能洲往復すること數十回なるも概ね用を帯びて船車の便を假るゝのなれば其の景勝の地を踏めること一半にも及ばず偶々能登まぐりてふ書を読み詩思湧くが如く腰折百篇に至れるを爰に其の二三を録し以て能因法師の歌枕に擬す。

能く飲んで管を枕の大野人の笑ひも白河の關

末森城趾 前田家の老臣奥村永福が籠城の古跡なり。

諸共に城を枕の心もて末森かへす勳立てつれ

兜塚

此のほとり今も耕地より往々太刀物の具を掘り出すことあり。

兜塚かぶとの主は埋もれてたゞ物の具になごり留むる

芝垣

日乘上人の伯父芝原將監てふ富豪ありて其の城内に近江八景伊勢の神垣などを摸したる跡今も其の面影を見るべしといふ。

其の昔玉を炊さし跡たえて只柴原の名を實にして

敷波

此邊冬季の夜は炬燵の爐上に格子を箆め之に蒲團を敷きて臥す習慣ひなりなれぬものには寢ごゝち宜しからず。

埋火の上に蒲團を敷波の夢や通へる高麗のオンドル

晦日川

徳田村は壽福院の生地にて二所宮村晦日川の淵に其の鏡沈みあり水濁るゝ時

我が袖は晦日の淵の濡鏡かげこそうつれ包むよしなき

は其のかげ見ゆといひ傳ふ。

神代川

水源は佛木山の奥より發するよし本地垂跡説もありてをかしかりければ。

神代川其の源は佛木の跡垂れたまふ関仰しなるらん

赤目の淵

川の二里ばかり川上にあり川尻其の横穴は奥底測りがたしとぞ。

わきむいて赤目の淵の横穴は奥底知らぬ人やすむらん

福野瀉

一面の蘆原にして神代川帯の如くにめぐり神代村は島の如くに見ゆるよしなり。

神代の姿尊とき福野瀉豊蘆原の中津村とて

機織岩

此のあたり福浦の風光いはんかたなく能州西の絶景この邊より始まる。

荒磯に機織岩の立つからは浪に千鳥の絹や織るらん
沖津風福浦の磯の藻をしげみ岩より岩に傳ふささ波

産神村

義經北國落の際空の君の分鏡せし地といひ傳ふ（京の君分鏡の地は越後の米山の麓上輪の龜割坂と傳へらば胞衣姫の祠辨慶金剛杖の噴泉などあり又金澤蛤坂にも傳來あり其外所々にある由あり）此の地の小石を拾ひて懐中せば安産の守りとなるよし言ひ傳ふ。

安産の守りに石を拾ふものをなどうまづめを石婦とやいふ

歌仙貝

宮木の歌仙貝とて三十六歌仙に見立てたる種々の美しき貝より古來此の地の名物として先年鶴駕北巡のをりも台覽に供へたりといふ。

歌枕トキの濱邊の歌仙貝雲井の庭に奉らばや

龜の石

荒木山の麓の海中へ突き出てたるあたり風光絶佳龜の石とて海中に屹立せる天工の奇驚くべきものありといふ。

荒木山あらし浪間の龜の石浦島の子や乗りすてにけん

椿原

昔若狭の八百比丘尼とて八百年の齡ひを保ちしとかいへる尼僧が齋したる椿の種を此處より貝田熊木など二里ばかりの間に蒔きたるものにて四季花絶えずとぞ

數珠の緒のいとも愛度椿原八千代の色をこゝに留めて

熊野

成經俊寛康頼等が流謫の地（此の地の傳説にて種々の考證あるよしなり）にて彼等が觀修せし熊野權現堂は當時既に越中の國司次郎兵衛盛次が邸に移せし由（按ずるに此邊古來流謫の公卿多く平大納言時忠の如きも其の一とされば夫等より附會したる説ならんか）俊寛等の塚跡も存するよしいへり。

白痴男と笑はゞ笑へ福原の堤塚ちし蟻塚の主

音無の瀧

深見村音なしの瀧は丈六の古佛立ち賽の河原の名所ありて老松並柏蒼鬱として苔蘚青蘚を敷き百尺の瀑布珠簾を懸くるが如くなるも世人知る者多からず

といふ。

山深見かゝる眺めも聞えねば世に音なしの瀧といふらん

要石 光浦の要石はいかなる地震にも動かずといふ。

要石國の稜威の光浦動かぬ御代のためしなるらめ

劍地

昔鬼形の刀工あり美男に假裝して此の地某の婿となり鍛刀の室へは人を入れず後鬼形を見顯はされれば忽然波濤を蹴て滄溟に立去りしとぞ今も猶鐵物を打つ鍛冶多し。

荒浪に幾世洗ひき劍地や日本心をきたふあらがね

腰細の浦

鹽濱にて古來流竄の公卿此の地に遊びて沙風に染まりし松風村雨を選擇せし名所とやら。

藻鹽汲む蟹婦の小簀の風軽く腰細乙女唄ひつれつゝ

饒石川

古歌あり宗祇法師などの歌跡もあり櫛比諸嶽山總持寺のありし地にて同寺の鶴見に移りてより頗に寂寞の感ありといふ。

くしびさす諸嶽山のあとさびぬ川に饒石の名は遺せども

七浦

皆月山の岬より小崎の鼻をも七浦の小灣を劃れり。

漁火の影はかくれぬ吾が夫は皆月山の岬越えけむ

有明の月は浪間に照りはへて曉寒き七浦の里

輪島

名産漆器は木地堅く塗り丁寧にして破損の虞へ少なく久しきにたへ世にもてはやさる。

人も亦かくてあらなん輪島塗り堅き木地もてつくる器の

七ツ

島 輪島の沖に七ツ島あり舳島との間に點在す。

夕餉たく煙りたなびき七ツ島顯えつ隠れつ風のまに

舳島

輪島海士町の婦女六月より九月末まで此の島に渡り住みて鮑、海藻など漁撈盛りなり蛋婦が長く海底に潜り水面に浮かひて吐く息笛は懐管悲痛斷腸の思ひあらしむ。

さくたびに魂たましひ消ゆるこゝちせり水底みなそこくゞるあまの息笛いきぶえ

五色石

輪島岬より袖の海(外の海ともいふ)一帯の景色勝れ五色石源氏貝など子女寄り集ひて拾ひ興ずる。

色に賞めでゝ拾ひろふ五色しきのさゞれ石知らでや濡るゝ袖の海とも

篝り竹

重蔵神社の例祭に竿の先に篝りを焚き夫を倒したるものは其の年多くの幸を享くとて引きあふ。

焚たきそめて幾世いくよへくらの篝かじり竹倒たふす力に幸さちやこもれる

源氏貝

袖の海の磯に五十餘丁の間を光るの浦といふ此の浦輪に源氏貝とていろく美しき貝殻よりあげられ乙女子は裳かゝげて拾ひきよす。

袖の海五十四丁の源氏貝げんじ貝光るの浦にかばね曝さらしつ

照る月の浪間なみま々々に碎くだくれば光るの浦うらに人は呼ぶらん

岩瀬の渡し 月の名所として古歌など多しといふ。

杜鵑ほととぎす岩瀬の渡し夜越えて岩倉山の月を見るかな

深山木

古哥に岩倉を深山木山と詠めるよし海中出願の千手觀世音岩倉寺に安置せらる。

慈眼じげんもて世をミヤマ木の觀世音あまの船路ふねぢを守りますらむ

外浦

時國より眞浦に至る海岸百丈の絶壁突兀と聳え千仞の碧潭怒濤巖に碎け杜荀鶴が北畔是山南畔海祇堪三書圖一不堪行の趣きあり山上に箕掃り越えてふ橋路ありて僅に里人の往來を通ずといふ。

沙路しほぢ漕こぐあまの小船せぶねの夫れならで越ゆるに難かたき能登のぼの外浦そとうら

這ふ虫を學びて越えん雨風の時國山の簑まくり越え
岩根踏み浪間を走る眞浦漁險しき道を渉る世の中

藥師堂

此の浦に藥師堂あり丈六金色の琉璃光如來立たせ玉ひて普く浦人の病を癒やし玉ふよし。

るり光の波に立たせてさし磨き世のいたつきを拂ふ浦風

珠洲の海

山陽先生能登の風光を賞して耶馬溪と共に海内の双壁など稱揚せしよし然るに平大納言時忠は此の地に謫せられて「のこの國聞くも証なれ珠洲の海又吹き戻せ伊勢の神垣」と詠みたりといふ山陽の春琴松陰等を隨へ此の地に遊びしは初夏の頃なれば之を歎賞するも宜なり時忠が開口せしは嚴冬風雪の頃なりしならん此の期節には目口もあかぬ猛烈なる吹雪き双壁どころか群鳥の外なからん。義經都落ちの後此の地に來りて時忠を訪へるよし。

珠洲の海あかぬ眺めをあく人はトキタゞ我れにつらければこそ
時鳥初音なりゆくスゞの海うら寂しくも見ゆる漁火

ヨシツネにわりなき人もさすらへる時タゞあしと歎くばかりぞ
フレバ鳴るスゞの岬の霹靂光るの浦に夕立ちのして

雁の橋折戸より正院へ越ゆる道に雁の橋の堤あり。

枝折戸をおとなふ聲は吾妹子が雁の橋より便りこそすらん

狼煙

日野阿新が佐渡の木間三郎を撃ちて後修驗者に救はれたることは史乘にも見ゆれど夫は修驗者と共に越後へのがれたる事となり居れど此の地の傳説にては其の修驗者は此の三崎山伏山に住す三崎權現に奉仕せるものゝ由にて阿新を助けて此の大谷の浦へ上陸したるよし云ひ傳ふ。三崎權現は羅破船を加護せられ其の靈驗にて此の山上に畑上る因て此村を狼煙といふよし此邊海路に啼き渡る雲雀ありといふ。

久方の雲井にまがふ沖つ浪雀もまどふ法性寺殿
波風に碎けむ船も此の沖に陸を三崎の神守ります
狼煙は妖婦の笑みのためならで惱める船を救ふ目標

妊娠りし子は誰が胤ぞ望の夜の珠洲の三崎のさこね祭りに

高坐宮

須々比古の神往古此の海に來襲せる靈神を退治ししふ時に鮮血海に湛へ石簇海岸に散亂すといふ今も矢の根石を拾ひて懐中すれば萬事負くる事なしといひ争ひ求む。羽咋の神も來襲の魔鳥を退治したる事を傳ふ。諸登西部海濱より加賀河北郡海岸へかけ石簇の散在せるより見れば羽毛を飾とせし石器時代の蕃人の來寇ありしやも知れず。

動しは世に高坐の神なれや荒ぶる夷打ちなびけつゝ

矢の根石身に秘めおかば絶えて世に吾に弓ひくものはあらしな
さすらひの身にしあらねど月見島配所の波の音とこそ聞け

珠洲の御牧

往古珠洲の御牧より朝廷へ駿足を奉る例にて古歌も二三あり名馬池月も此の地より出で先年御買上げとなりし俱利伽羅もこゝの産なり定家卿は「なづけつる鈴の御牧の駒なれど飼し古野や忘れざりけん」

沙風に鬣ふりて若駒の珠洲の御牧の霜に嘶く

粟津の晴嵐

此の邊より九十九灣、各名は矢張り流謫の月卿雲客によりて名附けられたると覺しく粟津、宇治伏見など皆平安附近の名を稱せしもの多し此海邊風光明媚眼界亦廣く雨越佐渡を一眸の下に集む。

通ひ來て粟津の海の濱千鳥鳴く音忍びて立ち歸るらん

立山や越の米山佐渡が島瀟湘の圖の卷を開きて

菱男波

こゝの海を忠の海といひ此の濱邊を忠の郷といふ昔此の里人多田某の娘が木郎村の男と契り陸路は險しければ夜な〜淺瀬を傳へて通ひけるに娘は目標しにとて磯の岩角に海べにうちよする枯葉など拾ひて簪りをたきてけり一夜男は波に捲かれてあへなくなりぬ娘は閉きてあられぬ思ひに海に入りて同じ藻屑となりて果てける夫れより此の海邊に菱男波とて離れてもかたみに寄する波出で來て此の里も路村となん呼べりけり。

分かれてもかたみに寄する菱男波いにし戀路の魂や残れる
たゞの海戀路を照らす篝火の同じ思ひに身を焦しつゝ

風をいたみ忠の磯邊の篝火の消えなんばかり思ひ沈みき
寄る浪に足を曳かれて徒に思ひぞ馳する篝火のかけ
うたかたの沫と消えてもなき魂は八重の汐路にあふ瀬まつらん
諸共に同じ浪間に消ゆるとも知らで契りし鴛鴦のさむしろ

豆殻胴の太鼓

松波の豆殻胴の大太鼓有磯の海の波に響かめ

矢波の夷石

梓弓矢波の濱の夷石釣りする船に幸やよすらん

灘川の一ツ家

灘川の一つ家(今一の家といふ)といへるに昔隣邑城の高城主甲山の平右衛門
督といへるが堀川大納言康實同衛督兄弟を助けて戦ひ敗れ一つ家の領主に援
助を請ひしにすぎなくあしらふて自害せしめたる處今も十坪ばり草はへずと
なん。

黒塚の鬼とも知らで頼み來てすげなくはつる一ツ家の原
たのむべき友を頼まてたよりなき人をたよりてはつるはかなさ

九十九灣

此の灣の風光明輝なるは松島に比すべく點々散在せる諸島皆古雅なる名稱あ
りて小舟其の間に逍遙し終日飽くを知らずと。道化山には古昔猿樂の演奏せ
られし遺風今猶残り居れりと。
諸橋の一本木といふ古木あり概なれど其の實は皆榎の實なり是も若狭の八百
比丘尼の植えたるものなりといふ。

古しへの舞ひの手ぶりも偲ばれむ伊豆岐の宮に残る猿樂

諸橋の一本概いかなればあだし榎の實を結ぶらん

上つ代の天のいらかを堀りいでて能登の土師の跡や尋ねん

年々に二たび實る田なつもの鶉川の神の御蔭なるらめ

神無月野に咲きそめて水仙の匂ひは絶えずささらぎの空

みてぐらの缶なるらむ神津石打ては幽けく鐘の音ぞする
 鳥婆玉の夜なく燃ゆる土筆石城を連ねし玉にやあらなん
 朝なく爪磨ぐあとは甲山天狗の石にあとをとめつゝ
 前立の鳥居はさびぬ甲山五枚鍔と見ゆるさざはし
 いさり船能登の晦日の夕なぎに唄ひつれつゝ漕ぎかへる見ゆ
 月清み行きかふ船の跡見えて香島の海にうつる島山

小牧々々場

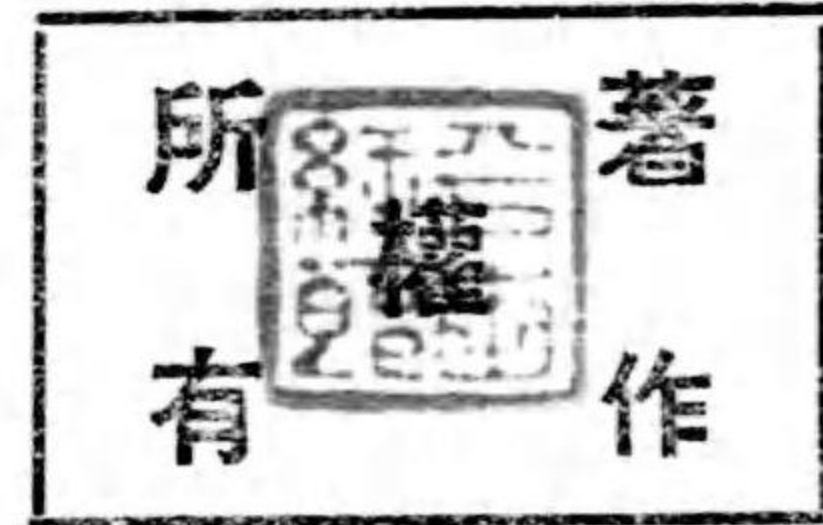
夫木抄「狩人の來ぬ日もありて高淵の山の雉子はのどけからまし」高淵山
 は小牧といへる牧場なりしも提すだれて野飼の駒のみ往來する事となりぬ。

狩人の來ぬ日はあれど高淵の野飼の駒の影はたえせじ
 あのがじと群れつゝ遊ぶ駒來とてコマキの里と人は呼ぶらめ

興 歌終

大正七年七月十七日 印刷
 大正七年七月廿一日 發行

定價金壹圓廿錢

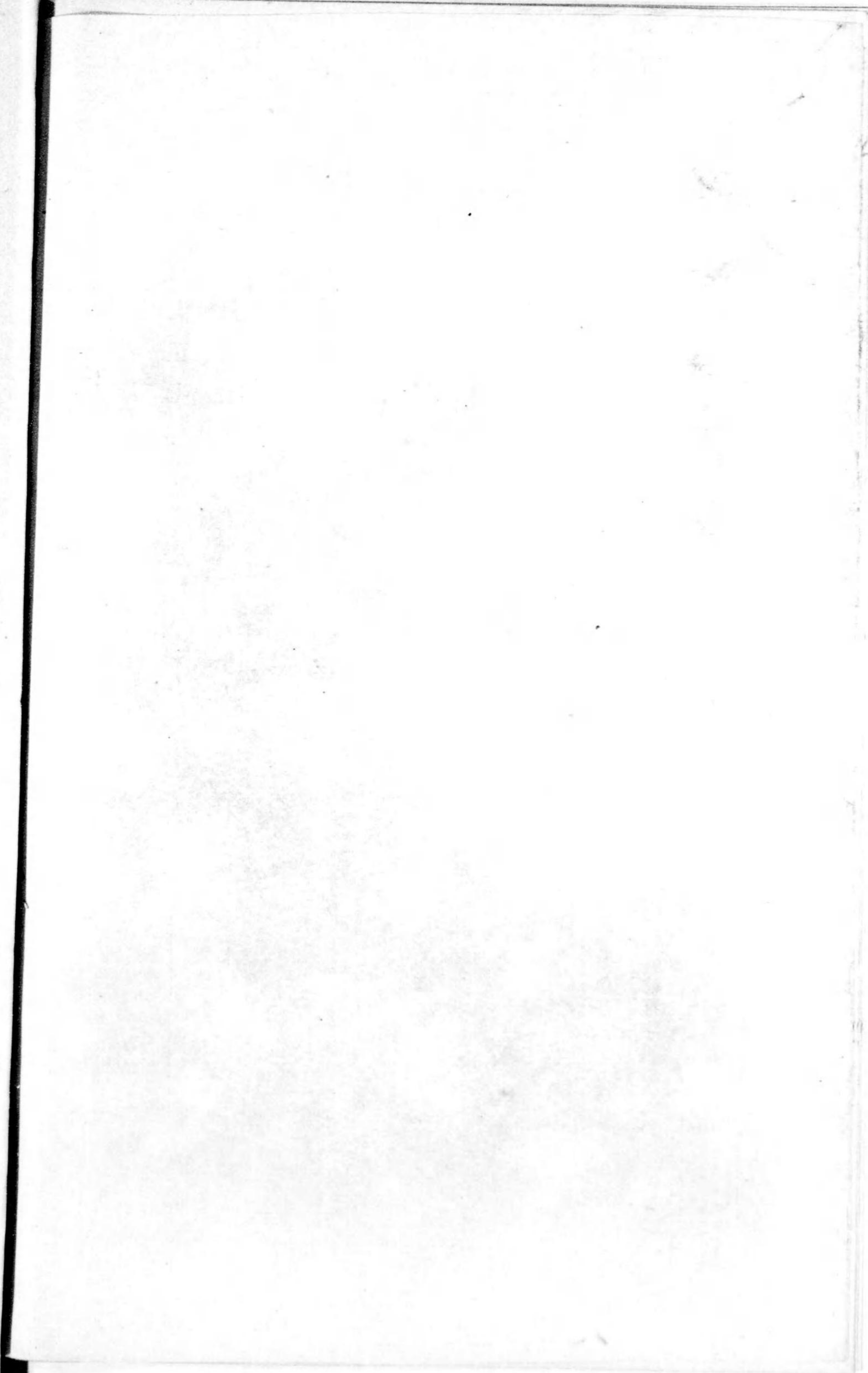
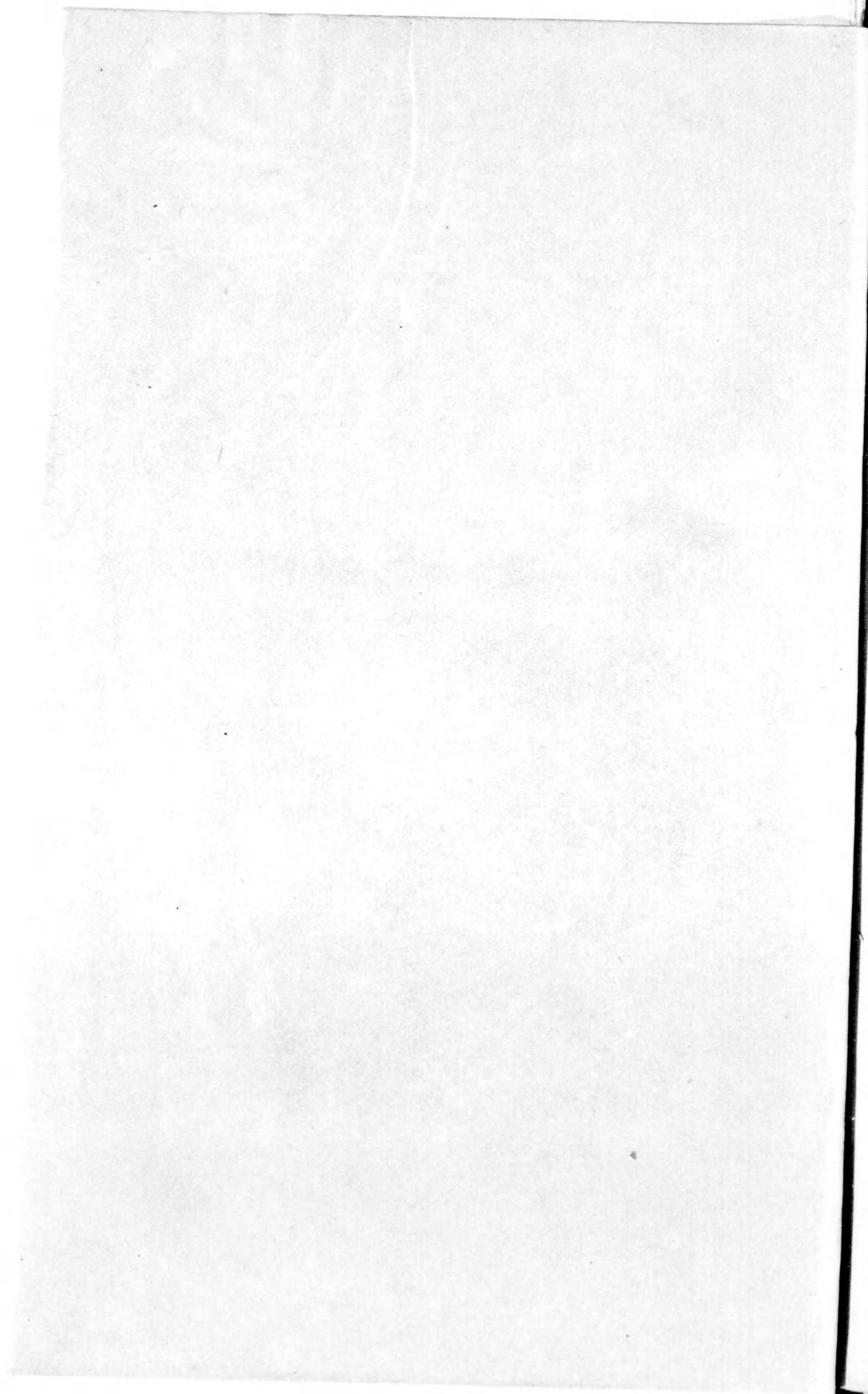


著者 平田純一郎
 發行者 井口興一
 印刷者 今成温平
東京市麴町區飯田町六丁目一番地
 東京市神田區表神保町十番地

發行所
 大賣所

東京市麴町區
 飯田町六ノ一
 東京市京橋區
 南紺屋町十八

丸 万 書 塵
 振替口座東京四〇二二三番
 小川尚榮堂



279
550

終

